

Willebrand 因子を測定し、異常の有無および関連因子を検討した。

〔対象〕未治療の NIDDM 患者35名、健常対照者22名。

〔方法〕駆血負荷試験を行いその後で t-PA 抗原、PAI-1抗原、von Willebrand 因子を ELISA 法で測定した。

〔結果〕(1) t-PA：糖尿病群、対照群とも駆血負荷により有意に増量し、両者の間に反応性の差異は認められなかった。負荷前の t-PA 値は両群で有意差を認めなかった。

(2) PAI-1：糖尿病群、対照群とも駆血負荷による変動は明らかでなかった。負荷前後の PAI-1値は両群で有意差を認めなかった。

(3) vWF：糖尿病群、対照群とも駆血負荷による変動は明らかでなかった。負荷前後の vWF は糖尿病群で有意に高値であった。

(4) 血糖値、BMI との相関：vWF は血糖値と、PAI-1は BMI と正の相関の相関を示した。治療により vWF は低下傾向を示した。

〔結論〕高血糖による血管内皮細胞障害、および肥満と線溶系異常の相関が示唆された。

5. 心房細動 (AF) における凝血学的検討—valvular AF (VAF), non-valvular AF (NVAF) の比較—

(循環器内科, *研究部)

薄井秀美・岩出和徳・青崎正彦・
上塚芳郎・梶本克也・森 文章・
竹田和代・半田 淳・根岸加代子・
細田瑛一・大木勝義*・甫仮妙子*

〔目的〕リウマチ性弁膜症に伴う VAF は血栓塞栓症の合併頻度が高いが、近年、弁膜症以外の AF の NVAF においても抗血栓療法の有用性が報告されて

いる。今回、我々は両 AF 症例において凝血学的検討を行い、血栓形成傾向を比較検討した。

〔対象〕AF 症例計49例 (男22例, 女27例, 年齢59.3歳; VAF 29例, NVAF 20例)。対照として弁膜症の洞調律症例 (valvular sinus rhythm; VSR) 8例。

〔方法〕測定項目は、線溶系は tissue plasminogen activator (t-PA), plasminogen activator inhibitor-1 (PAI-1), D-dimer, 凝固系は thrombin-anti-thrombin III complex (TAT), 血小板機能は β -thromboglobulin (β -TG) を測定した。また、心エコー検査により、左房径、左室拡張末期短径、左室内径短縮率を測定し、凝血学的検査との関係を検討した。

〔結果〕以下、VAF, NVAF, VSR の順に測定結果を記す。t-PA (ng/ml) は、 9.5 ± 3.8 , 12.5 ± 6.3 , 7.6 ± 3.3 で NVAF は VAF, VSR に比し有意に高値を示した。PAI-1 (ng/ml) は、 15.8 ± 8.6 , 11.7 ± 11.8 , 13.0 ± 5.8 で 3 群間に有意な差異は認められなかった。D-dimer は、正常値上限 150 ng/ml 以上の高値を示した例は VAF 29例中14例 (48%), NVAF 20例中6例 (30%) で両群間に差異は認めなかったが、VSR 8例中高値例を認めなかった。TAT (ng/ml) は、3.0以上の高値例は VAF は29例中14例 (48%), NVAF 20例中9例 (45%), VSR 8例中1例も認めなかった。また、D-dimer と TAT の間には VAF, NVAF とも有意な正相関が認められた (VAF: $r=0.66$, $p<0.001$ NVAF: $r=0.57$, $p<0.01$)。 β -TG は、 63.8 ± 75.5 , 39.4 ± 23.2 , 48.0 ± 19.3 でいずれも増加傾向を認めたが、3 群間に有意な差異は認めなかった。

〔総括〕AF では、血小板、線溶能に比し、凝固能の亢進傾向が認められた。NVAF は VAF と同様に凝固亢進を示す例が多く、抗凝固療法の適応例が多いと考えられた。

第11回東京女子医科大学血栓止血研究会

日時 平成5年3月5日 (金) 6:00~8:00 pm

場所 第一臨床講堂

当番世話人挨拶

一般演題

1. 抗結核剤のビタミン K 欠乏状態におよぼす影響について

(産婦人科) 武田佳彦

座長 (母子総合医療センター) 中林正雄

(消化器内科) 石井 史・中西敏己・屋代庫人・